

猿新聞

編集責任者
山村 準

tel:0595-63-1725

Email

yun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部

赤目地区：150部

箕曲地区：70部

ひなち地区：205部

つつじが丘：430部

【全戸配布】

国津地区：380部

滝之原地区：125部

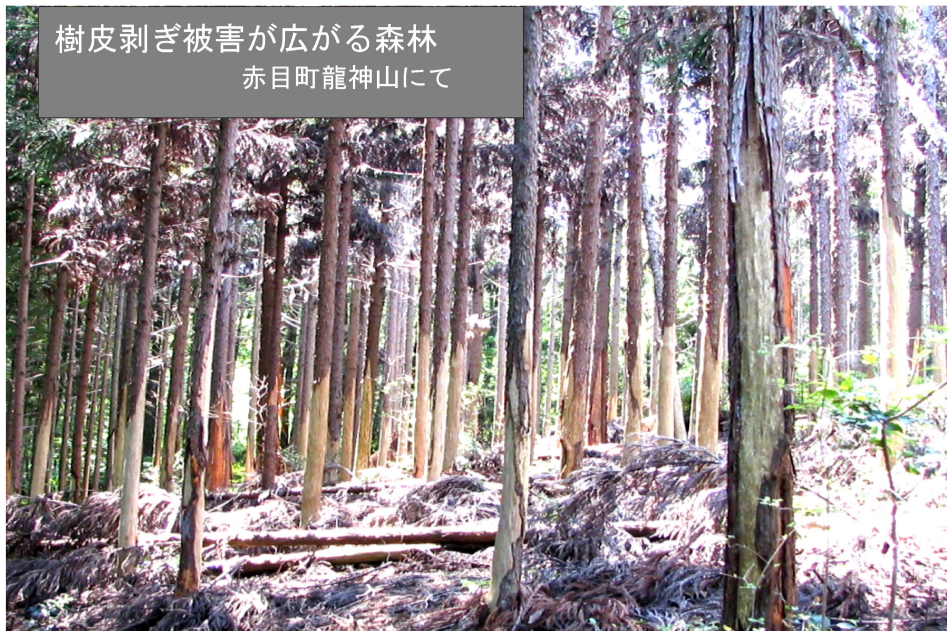
市民センター：90部

(9地区)

名張市議会：20部

名張市役所：30部

シカ激増の要因 農林業被害と 自然生態系破壊



樹皮剥ぎ被害が広がる森林
赤目町龍神山にて

ニホンジカ（以下シカと表記）は、1970年頃（昭和45年）と比べると異常に増加し、日本の自然生態系を破壊し続けています。なぜ、シカはここまで増えたのか？

ここで、激増の経緯振り返ってみたいと思

その一つに、シカは生まれつき「増えやすさ」と高い繁殖力を持ち合わせている動物です。多くの動物は、数が増えると餌や棲家が足りなくなると自然と数が減っていくものですが、ところがシカは反

芻動物で、毒草以外の殆どの植物や、その落ち葉、木の皮まで消化することができ、広範囲を移動することで、個体数を増やしていくことができます。更に、健康な雌ジカは満1歳で繁殖に加わり、2歳の春には出産するなど、若い世代が繁殖に加わ

れることで、生息環境が良くなったたり死亡率が下がるなど急激に個体数が増えていきます。・狩猟者の減少

シカにとって、人間による捕獲が個体数の減少に大きく関わっていた時代がありました。が、高齢化や山村地域の過疎化とともにない、20世紀の終わりにかけて狩猟者は減少の一途をたどり、現在も狩猟者の高齢化や減少は続いています。

・保護政策
戦中・戦後の混乱期に密猟を含めた乱獲がシカを激減させました。1948年になると全国的に雌ジカが狩猟獣から外される保護政策が始まりました。1978年には、雄ジカの捕獲数も1日1頭に制限されるなど保護管理が強化され、シカ

の数はV字的に回復を遂げました。しかも、保護政策は個体数の増加傾向が見られるにもかかわらず、メスジカの捕獲を禁止してきたことが激増の大きな原因と考えられます。・拡大造林

日本は、世界有数の森林大国と言われています。1950年（昭和25年代）半ば以降のエネルギー革命により、薪炭を生産する薪炭林の需要が低下するとともに、高度経済成長の下、建材用として成長の早いスギやヒノキの需要が激増しました。

結果、天然林や薪炭林を人工林へと変えていく「拡大造林」政策が取られました。政策は1996年（平成8年）頃まで続き、天然林などの伐採でできた当時の草地は、シカの好ましい環境となりました。

植樹した人工林の生育を待つ間に輸入した木材が安価で大量かつ安定的に供給されることから、海外産の輸入材を使用することが主流となりました。

こうなると価格が高い国産材は余ってしまい、使用するために植

林した樹木が伐採されず、国内では森林が荒れ果てたまま放置されているという別の問題が存在しています。

・過疎化
中山間地では過疎化が進み、集落やその周辺に人の手が入らなくなりつつあります。このように、中山間地域の活動衰退が農地への鳥獣の侵入を許し、野生動物と人との接触が増えつつあります。

今後、一層の人口減少や都市部への人口流出などで、中山間地域における、人間と野生動物とが棲み分けるエリアや境界線が大きく変わっていくことが予想されます。もともとシカやイノシシなどの野生動物は基本的に用心深く、わざわざ人のいる場所には寄ってきません。しかし、人間の気配が薄れた中山間地域では、動物の生息域と人間の生活圏の境界線が曖昧になっていて、農村部だけでなく平野部・市街地にまで鳥獣が出没する状況になっているのです。

積雪量が減る傾向にあります。それに伴い雪に弱いシカが生息できる範囲が増え、新たな餌場を求めて、尾瀬などの豪雪地帯や南アルプスなど高山にまで分布域を広げています。

観測史上気温の高い冬が続き、植物の開花時期が早まり、受粉を促す虫の活動時期とずれが生じ、受粉が円滑に行われず結実が損なわれる植物が多くなっています。

自然受粉は、主に風媒花と虫媒花に区別することができ、前者は風、後者は虫によって受粉が行われる植物です。

・捕食者の絶滅
かつて日本中の森林に

しかし、その破壊は不可逆的であり、二度と元の状態に戻らない可能性があると述べています。

シカに関する社会問題には、農林業被害と自然生態系破壊の二つがあります。これらの問題は混同されて扱われることが多いですが、問題の本質が全く異なるので、完全に分けて考え対処する必要があります。

近年、シカが社会問題として大きく取り上げられているのは、農林業・生活環境への被害は勿論のことですが、自然植生にも強い影響をもたらす、これまで進出することの少なかった高山帯にまで出現して、希少な植物が絶滅の危機に瀕するほどになっています。



裸地化した山林
神奈川県HP

このように外国から持ち込まれた動植物が日本各地に侵入・定着し、我が国固有の生態系を破壊しています。しかし、在来種でも、日本国内のある地域から、もともといなかった地域に持ち込まれた場合には、外来種となり、もともとからの地域にいる生物に影響を与える場合があります。

名張B群復活

名張B群とは、宇陀市

平成28年1月～3月に名張B群の大量捕獲が実施され群れの大部分を駆除しています。

大量捕獲前のB群生息数（40頭）。

- オトナオス3頭
- オトナメス12頭
- ワカモノオス2頭
- ワカモノメス1頭
- コドモ17頭
- アカンボ5頭
- 大量捕獲数27頭
- 有害捕獲数5頭
- 捕獲後推定数7頭

東部（室生地区）から名張市南西部にかけ奈良県・三重県の県境を跨いで生息しているサル群です。

県境を跨いで被害が発生する関係上、宇陀市、名張市は鳥獣害対策を連携して取り組むために「宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会」を立ち上げ対策にあたっています。

大量捕獲後の平成29年度の個体調査によると、

名張B群の個体残数は、わずか7頭という小さな群れとなっています。しかし、大量捕獲約一ヶ月後の28年4月22日、矢川でオトナ5頭と数頭のアカンボの出没を確認し、タマネギなど被害が発生しています。

その後、ゲリラ的に井手や四季が丘への出没が見られましたが、平成28年4月頃からの遊動域は西谷周辺に定着。平成30年6月以降は、電池切れによりモニタリング調査不能などで、長期間遊動域や

個体数は把握できない日々が続きました。令和2年2月5日、ようやく宇陀市西谷の旧小学校付近で個体捕獲。同日、発信器装着が確認し、タマネギなど被害が発生しています。

その後、遊動域も徐々に拡大して大量捕獲前に戻りつつあります。

そんな中、令和3年11月7日（日）14時半頃、矢川に15～16頭のサルの群れ出沒。急遽モンキードッグ（畠山さん）要請。矢川に出没したのは日曜日、各地域でのモニタリング調査は休みでした。

この位置情報から考えると、前日の7日矢川に出没した群れとの関連は考えにくいとのことです。

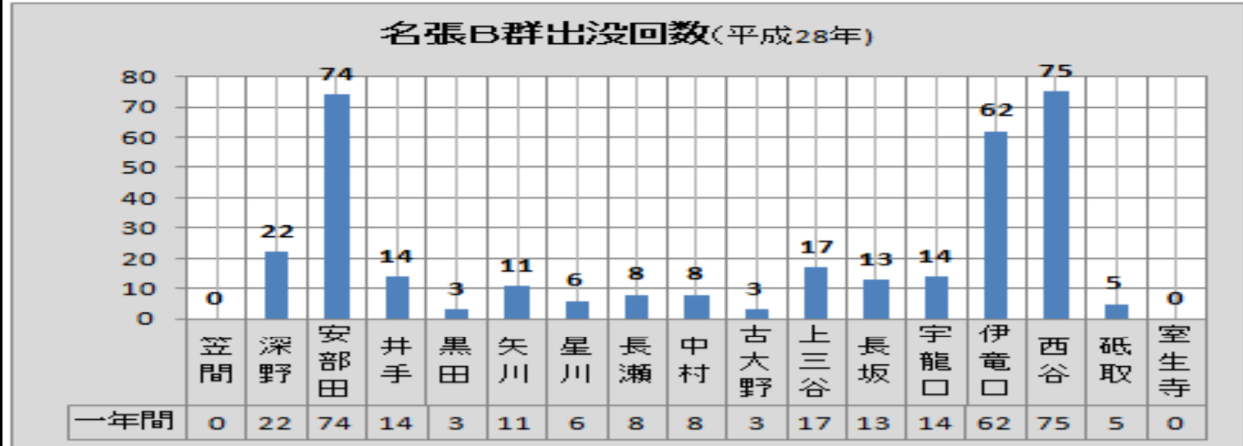
矢川に出没したサル群は何処から来て何処に向かうのか？約5年余りサルの姿を見ない地域の畑は丸腰状態の無防備！

B群エリアでは早急な柵の修繕や新設が必要で、大量捕獲後上図は、一年間の出沒状況をまとめたものです。

青山A群：種生神社で16時15分目視。青山B群：阿保・さくら保育園付近で15時15分目視。

名張鳥獣害問題連絡会 会長 田村 修市氏死亡につき、古川 高志氏を次期会長に推挙し、快諾を得ることが出来ました。よって新体制は次の通りとなります。

会長 古川 高志
猿新聞編集 山村 準
事務局 木戸 泰弘
会計・書記 畠山ひさ子 田北 利治
和 田 新三



一年間	空間	深野	安部田	井手	黒田	矢川	星川	長瀬	中村	古大野	上三谷	長坂	宇龍口	伊竜口	西谷	砥取	室生寺
1月	0	5	16	1	2	0	0	3	2	0	0	1	0	0	0	0	0
2月	0	6	14	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	4	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6	2	0	0
4月	0	4	1	0	0	5	0	2	2	1	1	0	0	1	12	1	0
5月	0	2	14	1	1	2	0	0	2	0	0	1	0	1	0	0	0
6月	0	0	11	10	0	0	0	1	2	2	0	0	0	1	1	0	0
7月	0	1	7	2	0	0	3	0	0	0	1	1	2	1	7	0	0
8月	0	0	2	0	0	1	1	0	0	0	6	6	4	2	7	1	0
9月	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	0	4	4	16	3	0
10月	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	12	18	0	0
11月	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	2	3	2	13	8	3	0
12月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	15	14	0	0

＝1月初旬の大量捕獲が影響しているものと思われます。

鳥小服

名張市に、幸せを運ぶ「コウノトリ」がやってきた



日本では、昔はどこにでもいた鳥ですが、おそらく農薬の使用や、田に住み着いている、虫や小動物が少なくなるにつれ数が減り、ほぼ絶滅してしまいましたが、最近では、人工繁殖が行われ、ごくわずかですが、数は増えてきています。国の天然記念物・コウノトリが、実りの時期を迎えた9月9日名張市安部田の田園地帯に3羽飛来しました。福井

県小浜市を7月に巣立った幼鳥の3兄弟で、田んぼでイナゴなどの餌を、ついでにむ姿が見られました。昔から「赤ん坊はコウノトリのくちばしで運ばれてくる」「コウノトリが住み着いた家には幸福が訪れる」と言う言い伝えがあります。これは、古いドイツの言い伝えです。ある村に子供がなかなか出来ず悩んでいた夫婦がいました。その夫婦の家の煙突に、シュバシコウが巣を作り始めました。それを見た夫婦は、しばらく煙突を使わないようにしました。やがて、シュバシコウは卵を産み、可愛い雛が産まれました。すると、長年子供が出来なかった、この夫婦にも子供が授かったのです。これを見て、周囲の人はシュバシコウが赤ちゃんを運んできた、と言い始めたそうです。(ちなみに、シュバシコウは、コウノトリによく似た鳥です)

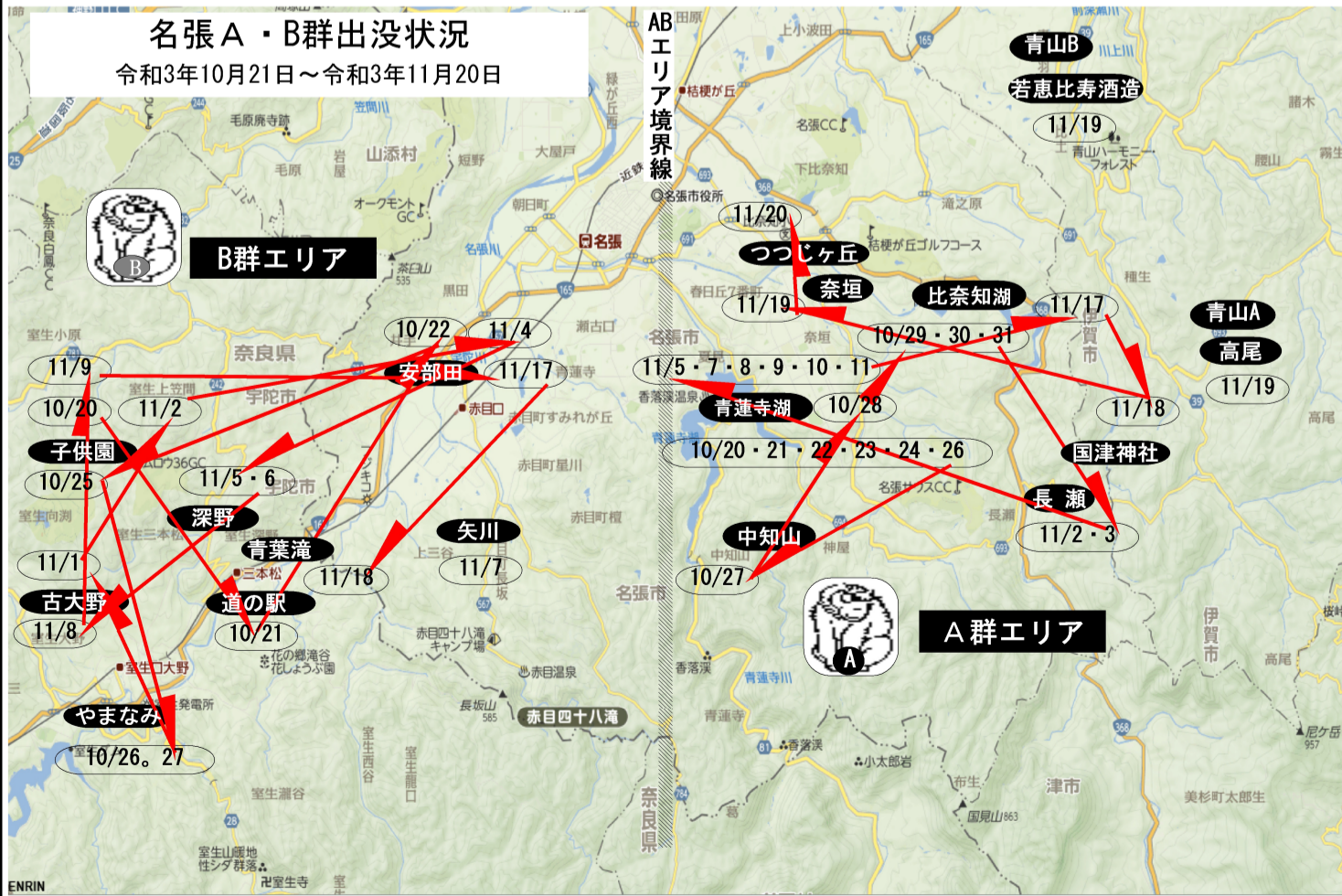
寄稿 田北 利治さん

16時・10頭目視。名張B群：室生区古大野で16時45分・受信。

かねてより病氣療養中であった、名張鳥獣害問題連絡会 会長 田村修市氏が令和3年10月22日逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

新たな決意のもと、本会の発展に努力いたします所存でございますので、旧に倍したご支援、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

会長 古川 高志



サル出沒状況

野生のサルは草木の葉や木の葉、昆虫などを主食としていますが、雪に覆われてしまうとエサを取るのが難しくなっています。

野生のサルといえども冬を越すのはなかなか大変なようで、年々個体や親とはぐれた子ザルなどは、越冬できないことも多いといえます。

エサの少ない冬は春から秋には食べるものがなかった木の皮や冬芽を食べ、飢えを凌いでいるようです。

名張A群は、相変わらず青蓮寺湖と比奈知湖への出沒が多いです。両湖周辺にサルを誘引する何かがあるはずですが、それが分かれば、サル

との棲み分けの手がかりに繋がるのではないのでしょうか。

名張B群は、遊動域を大きく拡大し、大量捕獲以前の状態に復活しつつあります。

先日（令和3年11月7日）14時30分頃、矢川を15～16頭の群れが通過しています。

この群れは、何処から来て何処に向かうのか？